

報 告

オリンピック科学会議に参加して

A Report on the
Olympic Scientific Congress 1992

廣 川 俊 男
Toshio Hirokawa

〈はじめに〉

筆者は1992年5月から約7ヶ月間、本学在外研究員としてスペインのバルセロナ市に滞在し、バルセロナオリンピックに関わるいくつかのテーマについて調査・研究をする機会をいただいた。今後、整理できたものから随時報告したい。

表題の学会は東京オリンピック以降、4年毎に五輪開催国に於て催されてきたもので、世界の体育・スポーツに関する研究の動向を知るためと、各国の研究者と情報を交換し、将来のためのネットワーク作りにチャンスと捉え、期待して参加した。

〈オリンピック科学会議とは〉

オリンピック科学会議は、1960年のローマオリンピックの後に International of Sports Science and Physical Education (ICSSPE) が中心となって準備を進め、64年東京大会で産声をあげた学会である。オリンピックという世界で最も大きなスポーツ大会を機会に、スポーツに関連の有る諸科学の研究者が研究発表や意見の交換を図ることを発足の目的とした。

それ以前のオリンピックにもこれに似た性格の学会が開催されたことはあったがIOC（国際オリンピック委員会）が承認し、オリンピック組織委員会が大会プログラムのひとつに取り入れたのは東京が初めてであった。オリンピック開幕を1週間後に控えた10月3日から8日まで開催された第1回の会議には日本人540人、外国からは180人の参加者が有り、「ドーピング」や「各国の青少年の体力テストの標準化」についての発表や討議が繰り広げられた。当時のIOC会長であったブランデージ氏が同会議の開会式で「この会議は参加者自身にとって有益であるばかりでなく、全世界にわたって広い影響をもたらすものだ。昔からチャンピオンについてみんなが知りたがっていた肉体的特性などに

*本稿は1992年12月、「体育の科学」第42巻 第12号に掲載された「第8回オリンピック科学会議に参加して」（広川俊男・清水富弘＝大分大学）に加筆したものであることを付記する。

について包括的な国際調査が着手されずに放置されてきた。この様な研究、調査の第一歩が今踏み出されつつある。I O Cはこれを歓迎し、支援する。」との祝辞を述べたことが新聞（朝日、1964.10. 3 付、夕刊）にも報じられている。

〈オリンピック科学会議 1992 in MALAGA〉

「スポーツと生活の質的向上」をメインテーマとして掲げた今回の会議は、バルセロナオリンピックの開幕を目前にした7月14日から19日の6日間にわたり開かれた。東京から数え、第8回の会議ということになる。

開催地となったマラガ市は、スペイン南部のアンダルシア地方を代表する50万人都市で、バルセロナからは直線距離でも800km程離れているが、ヨーロッパでは「コスタ・デル・ソル（太陽の海岸）」の名で広く知られたリゾート地の中心でもある。会場となった「エル・オテル・カシノ・デ・トーレケブラーダ」というホテルは、カジノ、ナイトクラブを有するこの地域でも最高級のもので、プール、会議室、レストランなどの設備も参加者の多くが驚くほど豪華だった。

大会には、約40ヶ国から1000人を超える参加申込みがあった。大会の抄録集には、「スポーツ経営・経済学」「スポーツ医学」など15の専門分野別セッションと、「オリンピズム」「フェアプレイ」など5つの広領域セッションの合計20のセッション（表－1 参照）に485（内116がスペイン人研究者によるもの）の研究概要が載せられていた。日本体育学会の専門領域区分（表－2 参照）にのみ馴染んできた筆者には今回の区分の仕方も興味深いものだった。

又、昨今の日本の学会や関係者の間では、しばしば、用語として「体育」と「スポーツ」のどちらを用いるかが話題となるがこの会議では「スポーツ」が「体育」（Physical Education）を圧倒していた。

表-1

第8回オリンピック科学会議に発表された研究の内訳：

「専門分野別セッションと演題数」 *抄録掲載順

*()内はスペインの研究者によるもの。

・スポーツ経営学・経済学	16 (7)
・障害者の身体運動	31 (4)
・建築とスポーツ施設	2 (0)
・バイオメカニクス	34 (4)
・運動生化学	27 (8)
・身体運動測定学	46 (9)
・スポーツ法	18 (13)
・運動生理学	33 (5)
・スポーツ史・哲学	14 (2)
・スポーツ情報・文書整理	14 (10)
・スポーツ医学	33 (9)
・スポーツと女性	13 (0)
・スポーツ教育学と比較体育	95 (23)
・スポーツ心理学	30 (11)
・スポーツ社会学	37 (7)

小 計 443 (112)

「広領域セッションと演題数」

・スポーツ・フォー・オール	11 (1)
・フェアプレー	7 (2)
・スポーツと伝達手段 (マス・メディア)	8 (0)
・オリンピズム	10 (1)
・発展途上国	6 (0)

小 計 42 (4)

合 計 485 (116)

表－2

第43回（1992年）日本体育学会専門分科会の内訳：

- ・「体育原理」
- ・「体育史」
- ・「体育社会学」
- ・「体育心理学」
- ・「運動生理学」
- ・「バイオメカニクス」
- ・「体育経営管理」
- ・「発育発達」
- ・「測定評価」
- ・「体育方法」
- ・「保健」
- ・「体育科教育法」
- ・「スポーツ人類学」
- ・「広領域」

どのセッションに於いても1～2の招待講演（1題約30～40分）、数題の口頭発表（約10分程度）がなされ、それ以外はポスター掲示による発表だった。朝9～11時のセッションの後は30分のコーヒースタイル、そして午後1時30分～4時30分が昼食と昼休み、その後9時までが午後のセッションというスペインらしいスケジュールで進められた。

〈研究の動向と内容〉

発表された研究内容や全体的な傾向についてであるが、残念ながら私が参加したセッションには限りがあるため、また私自身の知識や語学力にも限界があるため、自分自身でそれを正確に把握する事は出来なかった。しかし、休憩タイムや大会事務局が設定してくれた連日の交流プログラムを通じて様々なご意見を伺うことができた。日本から来られた先生方、スペインの研究仲間、10数人の非常にまとまった、且つ熱心なブラジル人の研究者グループ（彼等の何人

かは同国バレーボールチームの研究協力者でもあり、その後バルセロナに乗りこみナショナルチームの活躍に貢献した)、その他にもよく顔を合わせた韓国や中南米からの参加者のお話をまとめると次の様になりそうだ。

- ・画期的で斬新な研究と出会うことは少なかったが、各国の教育や体育・スポーツの歴史や現状、制度や組織、研究機関の実情などをイメージできたり、研究のテーマの設定やアプローチの仕方などには国柄が反映されていて興味深かった。
- ・研究者間の情報交換ができたことや今後の協力の約束ができたなどの成果があった。

また、発展途上国からの研究者の発表や「発展途上国」のセッションに参加した日本の先生方の中から「発展途上国の抱える問題の複雑さを認識すると共に、今まで十分な注意を払えなかったこの分野にも注目していく必要性を感じた」との感想も出された。

以下には私自身が参加したセッションの発表内容を簡単に紹介したい。

まず、一番期待して臨んだのが「経営・経済学」のセッションだが、抄録には16題が掲載されていた。ここで第一に気付いた点は、体育やスポーツを専門分野として活躍されている方々だけでなく、経済、経営、心理学などの研究者の参加が多く見られたことだ。

- ・フランスのMINQUET氏は、スポーツ組織体に経済理論を導入しようと試みた。
- ・イスラエルのINBAR博士は心理学者の立場から同国のスポーツ教育機関の組織的ストレスや精神的摩耗を予防する作戦の研究の結果報告をした。
- ・スペインの経済学者CAMARA氏はバルセロナ五輪を例に、スポーツに対するスポンサーのマーケティング理論を展開した。
- ・同じくスペインの経済学者LOPEZ氏とGOMEZ氏も企業のスポンサーシップに関する研究を2題発表した。

もう一つ、「スポーツと産業界」に関係する研究が多かったことが特徴として上げられよう。分類しにくいものもあるが少なくとも過半数はこれに属する

ものだった。

- ・日本の佐々木氏は、「ハウス・テンボス」を例に、レジャーパークの経済効果について発表した。
- ・ロシアのFOMIN氏も「スポーツと市場の関係」を準備されていた。(当日は欠席)
- ・ドイツのALTENBERGER氏は、スポーツ産業が果たして人々の健康生活に貢献できる方向にあるのかをアンケートやインタビューによって検証しようとした。
- ・スペインのALFARO 女史は私的スポーツ・レクリエーションクラブにおける戦略的プランニングのモデル作りを試みた。

更にカナダ、イギリスからもスポーツ産業に関連する研究発表が用意されていた。セッションの中でも繰り返し述べられていたことだが、この領域が多くの研究者の関心を集めていることは疑いないようだ。

一方、

- ・スポーツ組織の財政的危険度分析 (PURONAHU 氏ーフィンランド)
- ・デンマークのスポーツ協会に於けるボランティア活動 (IBSEN 氏ーデンマーク)
- ・スポーツセンター開設の計画立案、運営システムの導入、コストの分析など3題 (LOPEZ de CARRION GOMEZ 氏ースペイン)

などの発表もそれぞれの国の組織や活動の様子が分かり、参考になるものだった。

「建築とスポーツ施設」のセッションでは、招待講演と口頭発表が各1題ずつなされたただけだったがその分質疑応答にたっぷりと時間が使われた。特にベネズエラの建築家VERA GUARDIA博士は「生活の質を向上させる手段としてのスポーツ施設」の講演の後、質問に応える形で熱心に自説を展開された。私自身の研究テーマと重なる部分もあり興味深く拝聴したので少し紹介したい。

まず氏は、特に発展途上国では、体育のための施設が学齢期の青少年を対象に設置されており未就学時や第3世代への配慮が欠けていること、人口の75%

を占める貧困と隣り合わせの人々にとって唯一の楽しみとも言うべきレクリエーションのための施設も、彼等の日常生活圏から離れていて、交通手段確保の経済的余裕が欠如していることなどにより、利用のチャンスがしばしば奪われていること、それに、スポーツ施設は本来、あらゆるレベルの競技会などに使用されるのと同様にコミュニティの人達のプレイやトレーニングにも使われるべきなのに、多くの場合実現されていないことなどを指摘した。また、人の生活の質は、人的変数＝人の健康状態、環境変数＝自然環境＋人為的環境、実質的変数＝仕事＋安全保障、の3つの変数に依るとした。更に人間の全面的な発達を達成するためには生物学、心理学、社会学の人に関わる3領域を包含して考えていかなければならない、とも言及した。そして、これらの視点から、行動、自由時間、生活条件、環境問題、通信体制、レジャーと経済等といった面での新しい生活の方向を予測し、最後にこれからのスポーツ施設の造られ方、使われ方についての提案を12項目に整理して述べられた。施設は全年齢層、全ての体力レベル、技術レベルの人達の使用を視野に置くべきだとか、生活、勉強、仕事、自由時間のゾーンに設置されるべきだとか、ニーズの画定、建設の計画（入札やデザイン等まで）、管理や使用の計画にまで住民が積極的に参加すべきだ……といった内容で、やや理想論的にも聞こえたのだが「政治的な配慮から、造られるまでには至っても十分機能するまでには届いていない」とする氏の指摘は、先進諸国からの参加者も肯く点が多くあったと思う。

「スポーツとマスメディア」セッションにおける「'92冬季五輪テレビ放送の分析」（McCOLLUM氏－アメリカ）では全放送時間の26.5%がコマーシャルタイムが占めていたことが報告され、五輪に対するスポンサーの強い影響力を再認識することになった。

「発展途上国」セッションではブラジルのMATSUDO氏が「途上国のスポーツ科学振興の役割と問題点」と題して講演された。各国の平均寿命やブラジルの富裕な地区や家庭と貧困な地域の少年達の体格、体力の比較（身長で10cmも差がある）などの例を上げながら、抱える問題点を示し注目された。

〈むすび〉

オリンピック科学会議に参加したことにより国内外の研究者の方々と新たに知り合えた。そしてこの間、何通かの手紙が届き、情報の交換が始まった。この機会を与えて下さった新潟産業大学教職員の方々と、変則授業に耐え、頑張ってくれた学生諸君に改めて感謝したい。